



Title	金沢方言におけるノダ相当表現の変化：若年層を中心
Author(s)	中江, 咲葉
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2024, 20, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100648
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

金沢方言におけるノダ相当表現の変化 —若年層を中心に—

中江 咲葉

【要旨】

石川県金沢市には共通語の「のだ」に相当する伝統的な方言形式として「ガヤ」があり、この形式を含め、これまで複数のノダ相当表現（ゲー・ゲン・-eN・ンヤ・ガ・ガン・-aN・ン等）が使用されてきた。本稿では、高年層・中年層・若年層それぞれの金沢方言話者が使用するノダ相当表現を分析した中村（2011）を踏まえ、中村の調査から 11 年を経た 2022 年現在の若年層を対象に同様の調査を行うことで、中村（2011）以降のノダ相当表現の変化と、その変化に関わる要因について考察した。その結果、現在の若年層の使用実態として地方共通語化・全国共通語化の進行が見られる一方で、依然として方言形式、地方共通語形式、全国共通語形式が混在した状態であること、さらにその実態には、①地方共通語化や全国共通語化、②他方言の借用、③変化の阻止、といった複数の要因が関わっていることが明らかになった。

【キーワード】金沢方言、ノダ、ノダ相当表現、地方共通語化、全国共通語化

1. はじめに

石川県金沢市で使用される、全国共通語（以下「共通語」とすることがある）の「のだ」に相当する方言形式には、伝統形式「ガヤ」のほか、ンヤ・ガ¹⁾・ガンヤ・ガン・ゲー・ゲン・ン・-eN・-aN・ナンヤ・ナガ・ナン・ネンなどの多様なものがある（新田 2004、野間 2015b）。-eN・-aN は動詞の語幹等に直接接続する形式である。以下に、本稿の対象である若年層が使用する形式の例文を挙げる。(3) (5) ガ-eN、(8) (10) ガ-aN の例である²⁾。なお、括弧内は共通語訳である（以下同様）。

- | | |
|---------------|------------------------------|
| (1) 今日家におるンヤ。 | (今日家にいるんだ。) |
| (2) 今日授業あるゲン。 | (今日授業があるんだ。) |
| (3) 来週旅行行ケン。 | (来週旅行に行くんだ。) [行ケン ik-eN] |
| (4) 明日テストネン。 | (明日テストなんだ。) |
| (5) 先週旅行行っテン。 | (先週旅行に行ったんだ。) [行っテン ik-t-eN] |
| (6) どこ行くガン？ | (どこに行くの？) |
| (7) 何するン？ | (何をするの？) |
| (8) どうすラン？ | (どうするの？) [すラン sur-aN] |
| (9) 果物好きナン？ | (果物が好きなの？) |

1) 本文中で挙げている「ガ」や「ゲ」の子音は鼻音[n]である。

2) (10) のンは (7) のンと出自が異なる形式-aN である可能性がある（2 節、3 節で詳述）。

(10) ご飯食べタン? (ご飯食べたの?) [食べタン tabe-t-aN]

これらの石川県金沢方言（以下「金沢方言」とする）のノダ相当表現について、高年層・中年層・若年層の自然談話データの比較により年齢層ごとの使用実態を調査した中村（2011）の結果では、若年層において使用される形式は方言形式と地方共通語形式が混在した状態となっていた。本稿では、中村（2011）の調査以降、その状況が収束へ向かっているのか、依然として複数の形式を使用する状況が続いているのか、その実態を明らかにするとともに、その実態の根底にある言語変化のメカニズムについて考察することを目的とする。具体的には、上記のノダ相当表現について、平叙文・疑問文それぞれにおいて現在の若年層が実際の談話の中でどの形式をどのくらい使用するのか調査し、中村（2011）の結果と比較することによって、金沢方言話者に使用されるノダ相当表現の変化を明らかにする。

以下、本稿では、第2節で先行研究と問題のありかを示し、第3節で調査概要と分析の枠組を述べる。続く第4節では調査結果を示して中村（2011）との比較を行い、第5節で考察を加える。最後に、第6節でまとめと今後の課題を示す。

2. 先行研究と問題のありか

この節では、金沢方言におけるノダ相当表現の変遷過程、及び、本稿の調査の方法に関する経年調査についての先行研究を取り上げる。2.1節で当該方言におけるノダ相当表現の変遷過程に関する研究、2.2節で本調査の比較対象となる先行研究、2.3節で経年調査と言語変化に関する研究を取り上げ、2.4節で問題のありかを整理する。

2.1. ノダ相当表現の変遷過程

新田（2004）は、伝統的な方言形式「ガヤ」から他の形式が生じる過程に関して、ノダ相当表現が活用する語に接続するか活用しない語に接続するかで分類し、次のように述べている。まず、活用する語につく形式では、(I) ヤがある完全形（ガヤ・ンヤ・ガンヤ）、(II) ヤがない短縮形（ガン・ゲー・ゲン・ガ・ン）、(III) 融合形（-aN・-eN）の3段階に分けられ、(I) → (II) → (III) の順に変化している。(I) に属するンヤは地方共通語³⁾であり、(II) のンはンヤからヤが脱落したものである。一方、活用しない語につく形式の場合も同様に、(I) ヤがある完全形（ナガヤ・ナンヤ）→ (II) ヤがない短縮形（ナガ・ナン・ネン）の順に変化している（図1）。なお、以上のノダ相当表現の中では、平叙文ではゲン、ネン、-eNなどのエ段の母音を含む表現が使われ、疑問文ではガン、ナン、-aNなどのア段の母音を含む表現が使われることから、新田は、前者を「E群」、後者を「A群」として分類した。

3) 地方共通語について、新田（2004）では「共通語とは異なるが広い分布域をもつもの」と定義しており、金沢方言のンヤを地方共通語としている。野間（2019）によると、ンヤは大阪方言のノダ相当表現であるので、新田（2004）で使用されている「地方共通語」は関西方面から広がっていることばを想定していると考えられる。本稿でも「地方共通語」という用語を、関西方面のことばで、金沢方言でも使用されることばを指すものとして使用する。

金沢方言におけるノダ相当表現の変遷過程

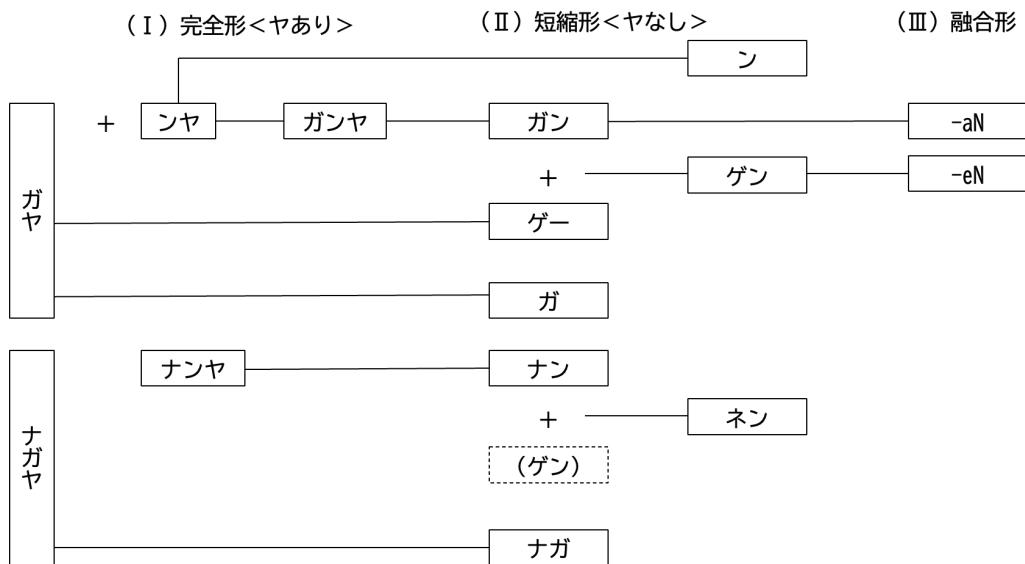


図1 新田（2004）によるノダ相当表現の変遷過程

また、野間（2015b）でも、伝統的な方言形式「ガヤ」から若年層方言のゲン・ネン・テン・ガン・ナン・タンへの変遷過程について述べられているが、図2のように、-aN・-eNという対立構造ができた後にガン・ゲン、その他の形態が生まれたと考えている点において、新田（2004）とは異なる。一方で、野間（2015b）ではノダ相当表現を文タイプ・述語の品詞・述語のテンスによって分類したうえで、E群（ゲン、-eN・-iN、ネン、テン）、A群（ガン（ケ）、-aN（ケ）、ナン（ケ）、タン（ケ））としており、ノダ相当表現の変遷の中で「E群：A群=平叙文：疑問文」という対立構造が生まれたとしている点では、新田（2004）と共通している。

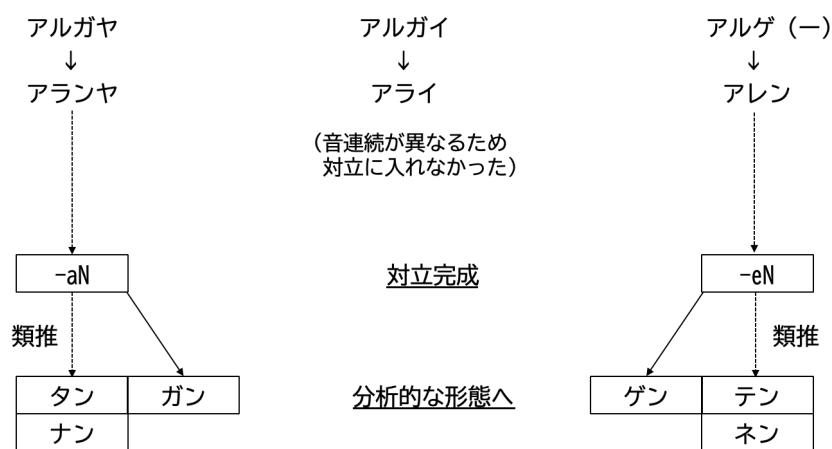


図2 野間（2015b）によるノダ相当表現の変遷過程

2.2. 談話データから見るノダ相当表現

中村（2011）では、新田（2004）を踏まえ、ノダ相当表現について高年層・中年層・若年

層の3世代の自然談話データを収集し、年代による形式の使い分けの違いを分析している。その結果、新田（2004）で示されていたノダ相当表現の変遷の順序と同様の変化が高年層→中年層→若年層の世代間で見られ、それぞれの世代で新しい形式を採用した様子が見られた。その一方で若年層では、地方共通語ンヤの使用も目立っており、新田（2004）で最も新しい形式とされていた-aNの形も失われつつあるなど、新田（2004）で示された変遷過程の中では最も変化の進んだ状態である（Ⅲ）融合形の形式に加え、地方共通語のノダ相当表現も使用される状態になっていた。

2.3. 言語変化の実時間的研究

次に、本稿は経年的な調査によって言語変化のメカニズムを解明することを目指すものであるので、これまでに行われた実時間的研究をいくつか見ておく。

国立国語研究所（1974）では、山形県鶴岡市の方言の共通語化について、1950年時点と1971年時点という20年の期間をはさんだ継続調査・パネル調査を行い、共通語化の要因として、1950年の調査では居住経歴、ついで学歴が影響していたのに対して、1971年の調査では年齢が共通語化の最も大きな要因となっていたことを明らかにした。

真田（1997）では、富山県五箇山の親族呼称の変化について、1935年、1965年、1995年という30年ごと、合計60年の継続調査を行なった。調査の結果、1935年には社会的階層が影響していた呼称が1965年には階層に関係なく一律化された呼称となり、1995年には標準語の体系を取り入れた呼称に変化していたことが分かったが、この変化には人々の社会意識が関わっていた。

真田編（2006:148-151）では、言語変化の進行段階ではことばの使用者の意識が大きな働きを持ち、使用者が新しい表現を好ましいと判断するかによって使用するかどうかが決まると述べられている。また、言語変化のプロセスについては、ある言語形式Xが別の言語形式Yに取り替えられる場合、旧段階と新段階の中間に移行段階が存在し、その移行段階では旧段階の形式Xと新段階の形式Yが併存した状態になることが想定できると述べている。

2.4. 問題のありか

中村（2011）ではノダ相当表現の変化を踏まえ、自然談話データの調査より、年代ごとに複数の新しい形式が使用されつつも、若年層では最も新しい形式であるはずの-aNの使用が減少してきており、地方共通語形式ンヤの使用という地方共通語化の傾向があると述べられている。そこで本稿では、以下の2つの問題を解明することを目的とする。

- (a) 2022年現在の若年層（年齢では中村の調査の約6年後に生まれた世代）を対象に自然談話データを収集・分析することで、ノダ相当表現の使用に関して方言形式と地方共通語形式が混在する状態となっていた中村（2011）以降の使用実態の変化を明らかにする。
- (b) さらに、ノダ相当表現の変化に基づき、当該方言に生じている言語変化のメカニズムについて考察する。

3. 調査の概要と分析の枠組

本稿では、金沢方言のノダ相当表現について、若年層の自然談話データを収集・分析することにより、実際にどの形式がどのくらいの頻度で使用されるのかを調査する。以下、3.1節で調査方法と調査対象を述べ、3.2節で分析の枠組について述べる。

3.1. 調査の概要

本稿では、対面とzoom上で金沢方言話者同士の自然談話を録音し、その談話データからノダ相当表現を取り出して、インフォーマントごとに使用された形式の種類とそれぞれの使用回数、さらに若年層全体の使用実態を整理する。

調査対象は、3歳から18歳を石川県で過ごした若年層（20代前後）とした。若年層に限定したのは、本稿が、中村（2011）における若年層が使用していたノダ相当表現と本調査の若年層が使用しているノダ相当表現を比較することにより、中村（2011）以降のノダ相当表現の変化を確認し、使用形式がどのように変化したのか、あるいは変化していないのかを明らかにすることを目的としているためである。本稿におけるインフォーマントは、生まれ年では中村（2011）のインフォーマントの約6年後に生まれた世代であるが、調査期間としては11年を経ている。

以下の表1に、インフォーマント情報を示す。インフォーマントの言語形成地には、川北町や白山市を含んでいるが、これらの地域はいずれも金沢市に隣接する地域であり、使用されるノダ相当表現も金沢市方言のそれと大きく異なるところはない。本稿ではこれらの地域で使用される方言も含めて「金沢方言」とする。

会話1がAとB、会話2がCとD、会話3がEとF、会話4がGとHのデータであり、会話1と会話2はzoom上で、会話3と会話4は対面でデータを収集した。Gの会話相手Hについては、金沢方言話者であるが、若年層ではないため分析の対象外としている（40代）。

データによって録音時間に差があり、調査結果に影響を与えることも考えられるが、分析するにあたって録音時間の差による影響と見られる点については各節で述べていく。

表1 インフォーマント情報

会話	インフォーマント	年齢	性別	居住歴
1 (30分) [Zoom]	A	22	女性	0~1 石川県野々市市、1~17 石川県川北町、 17~18 石川県白山市、18~現在 大阪府豊中市
	B	21	女性	0~19 石川県白山市、19~現在 東京都
2 (30分) [Zoom]	C	22	女性	0~現在 石川県金沢市
	D	23	女性	0~3 石川県野々市市、3~現在 石川県金沢市
3 (50分) [対面]	E	22	女性	0~19 石川県白山市、19~22 大阪府池田市、 22~現在 石川県白山市
	F	22	女性	0~1 新潟県、1~2 富山県、2~現在 石川県白山市
4 (20分) [対面]	G	22	女性	0~22 石川県金沢市、22~現在 石川県七尾市
	H	40代	女性	0~現在 石川県金沢市

3.2. 分析の枠組

本稿では、新田（2004）、中村（2011）、野間（2015b）のすべてが採用する「E群：A群=平叙文：疑問文」という枠組みに加え、(A) 形式のタイプと(B) 前接形式の二つの分類枠によってインフォーマントが使用した形式を整理する。(A) はノダ相当表現の形式面での分類である。(B) はそれぞれの形式が接続する直前の語のタイプを分類するものである。以下、E群（平叙文）とA群（疑問文）に分けて、それぞれの枠組みを具体的に示す。

3.2.1. (A) 形式のタイプ

本稿のインフォーマントが使用したノダ相当表現の方言形式は、表2の通りである。例文を合わせて示す。なお、表2では、主に平叙文で使用される形式であるE群（ゲン、ネン、-eN）とンヤを上段に、主に疑問文で使用される形式であるA群（ガン、ナン、-aN）とンを下段に示している。

表2 インフォーマントが使用した形式

形式		例文	
E群	ゲン	今からジム行くゲン。	(今からジムに行くんだ。)
	ネン	明日から夏休みネン。	(明日から夏休みなんだ。)
	-eN	明日ハンバーグ作レン。	(明日ハンバーグ作るんだ。)
		昨日ハンバーグ作っテン。	(昨日ハンバーグ作ったんだ。)
ンヤ		明日は天気良くないンヤ。	(明日は天気が良くないんだ。)
A群	ガン	どんな本読むガン？	(どんな本を読むの？)
	ナン／な+ン	コーヒー好きナン？	(コーヒー好きなの？)
	-aN	明日何すラン？	(明日何をするの？)
		昨日何しタン？	(昨日何をしたの？)
ン		今週末どこ行くン？	(今週末どこに行くの？)

以下、表2で挙げた形式について、接続が特殊なネン、-eN、ナン、-aNを中心にいくつか説明を加える。まずE群のネンについて、ナ形容詞語幹・名詞に接続する場合、中村(2011)では-eNとして分類されているが、本稿では「ネン」という独立した形式として扱い、-eNとは区別する。A群のナンについてもネンと同様に独立した方言形式「ナン」とするが、「ナ形容詞語幹・名詞+な+ン（地方共通語）」の「な+ン」とも解釈できるため、以下「ナン／な+ン」と表記する⁴⁾。

4) 「ネン・ナン」の扱い方について、中村（2011）では（11'）、（12'）のように-eN・-aNとして扱われている。

(11') 来週期末テストネン。 [名詞+な (n-) + -eN]

(12') 明日の天気晴れナン？ [名詞+な (n-) + -aN]

しかし、(12)について、地方共通語形式のンを使用する金沢方言でも、全国共通語でノダ相当表現がナ形容詞語幹・名詞に接続する場合に「ナ形容詞語幹・名詞+な+ノダ相当表現」と分析されるのと同じように、「名詞（晴れ）+な+ン（地方共通語）」と分析で

(11) 来週期末テストネン。(来週期末テストなんだ。) [名詞+ネン]

(12) 明日の天気晴れナン? (明日の天気は晴れなの?) [名詞+ナン/な+ン]

動詞型助動詞を含む動詞基本形、活用語のタ形に接続する場合のノダ相当表現については

(13) ~ (16) のように-eN・-aN として扱う。

(13) あのドアは引いたら開ケン。(あのドアは引いたら開くんだ。)

[動詞の基本形 (hirak-) +eN]

(14) カフェで勉強しとッテン。(カフェで勉強してたんだ。)

[活用語のタ形 (t-) +eN]

(15) どうすラン? (どうするの?)

[動詞の基本形 (sur-) +aN]

(16) ケーキの材料買っタン? (ケーキの材料買ったの?)

[活用語のタ形 (t-) +aN]

なお、これらの形式の表す意味については、4.1.2 節にあげる野間 (2015b) の図 3 と同じように、ンヤが対事的ムード (野田 1997 において「話し手自身が認識していなかったことを把握するときに用いられる」と定義されている) に専用されるなどのことがあるが、本稿は主に形式の経年的な変化を明らかにすることを目的とするので、以下、意味についての言及は最小限にとどめる。

3.2.2. (B) 前接形式

談話内で使用されたノダ相当表現を分析するにあたっては、対象となるノダ相当表現が前接する語によってどのように使い分けられているのかを分類することが必要である。基本的に、調査によって得られた談話データを対象にして分類するが、中村 (2011) との比較や分析の際に言及する部分もあるため、ここではデータに出て来なかつた形式も含め、筆者の内省⁵⁾により分類する。

分類は、ノダ相当表現が接続する直前の語をもとに、以下の 5 つの場合を考える。

- ① 動詞基本形 (動詞型助動詞を含む)
- ② 形容詞基本形 (否定辞ナイ・形容詞型助動詞タイを含む)
- ③ 否定辞ン
- ④ ナ形容詞語幹・名詞
- ⑤ 活用語のタ形

それぞれのノダ相当表現が①~⑤に接続可能かどうか、平叙文、疑問文ごとにまとめたものが表 3、表 4 である。ノダ相当表現の種類としては、表 2 に示した形式を含め、E 群 (ゲン・ネン・-eN)・ン・ンヤ・ノ・ンダ・A 群 (ガン・ナン/な+ン・-aN) などがあるが、新田 (2004) や野間 (2015b) でも述べられていたように、金沢方言のノダ相当表現は「E 群: A 群=平叙文: 疑問文」という対立関係にあるため、平叙文では A 群 (ガン・ナン/な+ン・-aN) が、疑問文では E 群 (ゲン・ネン・-eN) が基本的に使用されないので、それぞれの表

きる。つまり、ナンは「な+ン」と解釈することもできる。以上より本稿ではネンとナンを (11) (12) のように「ネン」「ナン/な+ン」として扱い、-eN や-aN とは区別する。

5) 筆者は 4 歳から 18 歳までの 15 年間石川県金沢市に住んでいた。

には含めない。また、判定詞のついたンヤ・ンダは当該方言では疑問文で使用されないので、表4には記載していない。それぞれの表において、接続できる場合を「○」で、接続できない場合を「×」で示した。

表3 前接形式による分類【平叙文】

平叙文		E群			ン	ンヤ	ノ	ンダ
		ゲン	ネン	-eN				
前接形式	動詞基本形	○	×	○	○	○	○	○
	形容詞基本形	○	×	×	○	○	○	○
	否定辞ン	○	×	×	×	×	×	×
	ナ形容詞語幹・名詞	×	○	×	○	○	○	○
	活用語のタ形	×	×	○	○	○	○	○

表4 前接形式による分類【疑問文】

疑問文		A群			ン	ノ
		ガン	ナン／な＋ン	-aN		
前接形式	動詞基本形	○	×	○	○	○
	形容詞基本形	○	×	×	○	○
	否定辞ン	○	×	×	×	○
	ナ形容詞語幹・名詞	×	○	×	×	○
	活用語のタ形	×	×	○	×	○

なお、表中で「×」（筆者の内省で接続できない）としたものの中には、談話データ内で使用されていた形式もあるが、それについては4節以降で説明する。

4. 調査結果

自然談話データを収集した結果、合計2時間10分の談話の中で236例のノダ相当表現の使用が見られた。談話において使用されたノダ相当表現はゲン・ネン・-eN・ンヤ・ガン・ナン／な＋ン・-aN・ン・ノ・ンダである。以下、4.1節で平叙文、4.2節で疑問文の結果をそれぞれ示す。なお、本節では、中村（2011）の若年層のデータを合わせて示し、両者の結果を比較する。

4.1. 平叙文

ここでは、平叙文の結果についてまとめる。4.1.1では本稿の結果について、中村（2011）の結果と合わせて整理した表をもとに特徴をまとめ、4.1.2で中村（2011）との比較を行う。さらに、4.1.3で平叙文における10年間の変化をまとめる。

4.1.1. 本調査の結果

平叙文で使用されたノダ相当表現の、前接形式ごとの用例数を、中村（2011）のデータと

金沢方言におけるノダ相当表現の変化

合わせて整理したものが表5である。表中の中村(2011)の数字に関しては、中村(2011)の本文において示されていたデータから筆者が若年層の数字を読み取り、表にまとめた。「×」は表3において接続不可としたもの、空欄は接続可能であるが談話データ内では使用されなかった形式を表している。また、本稿のデータの中にはE群に含まれるネンとは別の、地方共通語の「ネン」という形式の使用も見られたため、表に「△」の記号を用いて示した。このネンについては次節で詳しく述べる。表6は平叙文の動詞基本形に後接するノダ相当表現をインフォーマント別にみたものである。

表5 平叙文で使用されたノダ相当表現の使用数

平叙文		E群			ネン	ン	ンヤ	ノ	ンダ
		ゲン	ネン	-eN					
本調査	動詞基本形	25	×	5	△(2)		20		4
	形容詞基本形	17	×	×	×		8	1	1
	否定辞ン	32	×	×	△(1)	×	×	×	×
	ナ形容詞語幹・名詞	×	19	×	×		10	1	
	活用語のタ形	×	×	27	×		11		1
中村(2011)	動詞基本形	5	×	7			10		1
	形容詞基本形	3	×	×	×		3		1
	否定辞ン	7	×	×		×	×	×	×
	ナ形容詞語幹・名詞	×	11	×	×				1
	活用語のタ形	×	×	13	×		1		

表6 平叙文・動詞基本形に後接するノダ相当表現（インフォーマント別）

インフォーマント	E群			ネン	ン	ンヤ	ノ	ンダ
	ゲン	ネン	-eN					
A	1			2		4		
B						3		
C						3		1
D								3
E	4		4			2		
F	20		1			1		
G						7		
合計	25	0	5	2	0	20	0	4

以下、表5から分かることを前接形式ごとにまとめて述べる。

[1] 前接形式が動詞基本形の時

前接形式が動詞基本形の時、ゲンが25例、ンヤが20例と、他の形式より多く使用されている。(17) がゲン、(18) がンヤの例である。なお、例文として本調査で収集したデータを用いる際は発話の前にインフォーマントのアルファベットを記載している。その他は作例

である。

(17) F:当たり前の消費やと思つとるゲン。(当たり前の消費だと思っているんだ。)

(18) A:シンデレラ城のモデルになつとるンヤ。

(シンデレラ城のモデルになっているんだ。)

しかし、インフォーマント別で見てみると表6のようになり、ゲンを使用していたのは7人中3人と個人差がかなりある。動詞基本形については、より広く使われる形式は7人中6人が使用していたンヤであると言える。

[2] 前接形式が形容詞基本形の時

前接形式が形容詞基本形の場合も動詞基本形の時と同様に、ゲンヒンヤが多く使用されている。形容詞基本形に後接するゲンの使用者は7人中2人のみであり、しかもそのほとんどがFによる使用とかなり偏りがあるが、ンヤの使用者も7人中3人と、ンヤのほうがより広く使用されると考えられるほどの差はなかった。以下の(19)がゲン、(20)がンヤの例である。

(19) E:あんまり見とる人たちは多くないゲン。

(あんまり見ている人たちは多くないんだ。)

(20) F:うちらほど貴重じゃないンヤ。(うちらほど貴重じゃないんだ。)

[3] 前接形式が否定辞ンの時

否定辞ンに後接して使用されるノダ相当表現はネンを除くとゲンのみであった。32例のほとんどがインフォーマントFの発話であり若年層の傾向とは言えないが、そもそも否定辞ンにはゲンしか後接できない。(21)は否定辞ンにゲンが後接した例である。

(21) F:全然なんとも思わんゲン。(全然なんとも思わないの。)

[4] 前接形式がナ形容詞語幹・名詞の時

前接形式がナ形容詞語幹・名詞の時には、(22)、(23)のようなE群(ネン)やンヤが多く使用されている。

(22) C:名字ネン。(名字なんだ。)

(23) G:そうなンヤ。(そうなんだ。)

[5] 前接形式が活用語のタ形の時

活用語のタ形に後接する場合は、(24)のような-eNや(25)のようなンヤが多く使用されている。

(24) F:携帯とか触らんかつテン。(携帯とか触らなかつたんだ。)

(25) E:出来る人やつたンヤ。(出来る人やつたんだ。)

以上の特徴をあらためてまとめると、次のようになる。

[1] 前接形式が動詞基本形の時、ンヤが多く使用される

[2] 前接形式が形容詞基本形の時、ゲン及びンヤが多く使用される

[3] 前接形式が否定辞ンの時、ゲンが多く使用される

[4] 前接形式がナ形容詞語幹・名詞の時、ネン及びンヤが多く使用される

[5] 前接形式が活用語のタ形の時、-eN及びンヤが多く使用される

全体としては地方共通語形式ンヤの使用が目立っており、方言形式だけでなく全国共通語

形式であるノヤンダも少數ではあるものの使用されている。

4.1.2. 中村（2011）との比較

次に、中村（2011）の結果と比較する。中村（2011）では平叙文で若年層が使用するノダ相当表現について、以下のように特徴をまとめている。前節末尾のまとめ [1] ~ [5] に対応させて述べる⁶⁾。

- [6] 前接形式が動詞基本形の時、ンヤが多く使われる
- [7] 前接形式が形容詞基本形の時、ゲン及びンヤが使用される
- [8] 前接形式が否定辞ンの時、ゲンがより好まれる
- [9] 前接形式がナ形容詞語幹・名詞の時、ネンが多く使用される
- [10] 前接形式が活用語のタ形の時、-eNが多く使用される

中村（2011）の結果と本稿の結果を比較すると、表7のようになる。

表7 中村（2011）と本調査の結果の比較 [平叙文]

前接形式	中村（2011）	本調査
動詞基本形	ンヤが多く使われる	ンヤが多く使用される
形容詞基本形	ゲン・ンヤが使用される	ゲン・ンヤが多く使用される
否定辞ン	ゲンがより好まれる	ゲンが多く使用される
ナ形容詞語幹・名詞	ネンが多く使用される	ネン・ンヤが多く使用される
活用語のタ形	-eNが多く使用される	-eN・ンヤが多く使用される

両者の結果を比べると、平叙文については、ほぼ変化がないことが分かる。以下、中村（2011）の結果と比較して①変化している点、②変化していない点について整理する。

① 変化している点

- ・ 前接形式がナ形容詞語幹・名詞や活用語のタ形の時、E群の使用とともにンヤも多く使用されており、この点では中村（2011）の調査時と変化している部分でもある。また、本調査の談話データでは、中村（2011）では見られていなかった全国共通語形のノの使用が見られ、ンダも複数回使用されていた。
- ・ 中村（2011）の調査時には見られなかった表現として、「動詞基本形+ネン」や「否定辞ン+ネン」という表現も使用されていた（表5「△」部分参照）。

② 変化していない点

- ・ 前接形式が動詞基本形の場合にンヤが多く使用されるという特徴は変化しておらず、中村（2011）で若年層ではンヤの使用が目立ち、地方共通語化が進んでいると述べられていたことと一致する結果である。
- ・ 前接形式が形容詞基本形や否定辞ンの場合も、中村（2011）の調査結果と同じ傾向であり、形容詞基本形にはゲン及びンヤが、否定辞ンにはゲンが多く使用されていた。

6) [6] ~ [10] の特徴づけは中村（2011）による。

- 前接形式がナ形容詞語幹・名詞や活用語のタ形の場合に E 群（ネン及び-eN）が多く使用されている点も変化していない部分であり、中村（2011）の調査でも年代に関係なく使用されていた形式であることから、平叙文でのナ形容詞語幹・名詞、活用語のタ形に接続するノダ相当表現には変化が起こりにくい理由があるのではないかと考えられる。

ここで、上の①で指摘した「動詞基本形+ネン」「否定辞ン+ネン」という表現について考える。具体的には (26) ~ (28) のような例である。これらはナ形容詞語幹・名詞に接続するネンとは異なる形式であり、接続の面を考慮すると、本来ならゲン等が使用されるべきところである。

- (26) A: そういう所があるネン。 (そういう所があるの。)
 (27) A: こういうのに乗って移動するネン。 (こういうのに乗って移動するの。)
 (28) E: 情報入って来んネン。 (情報が入って来ないんだ。)

ナ形容詞語幹・名詞に接続するネンは、新田（2004、本稿にて図1として引用）によれば、活用しない語に接続するナガヤから変化したものであり、活用する語である動詞基本形に接続することはできない。とすれば、動詞基本形や否定辞ンに接続したネンは、野間（2015a）が述べるように、大阪方言あるいは地方共通語におけるノダ相当表現の1つの「ネン」である可能性が考えられる。野間（2015a）は、大阪方言と金沢方言（野間 2015a では石川方言としている）のノダ相当表現における現在の体系を比較して、以下の図3のようにまとめている⁷⁾。

大阪方言			金沢方言		
	対人的ムード	対事的ムード		対人的ムード	対事的ムード
平叙文	ネン	ネヤ	平叙文	ゲン	ゲンヤ
疑問文		ンヤ	疑問文	ガン	ンヤ

図3 大阪方言と金沢方言のノダ相当表現の体系比較（野間 2015a:142 参照）

この図では、金沢方言のゲンと大阪方言のネンが担う意味用法の範囲はほぼ同じである。このゲンとネンの類似性が、(26) ~ (28) のような表現が使用されるようになった要因と考えられる。インフォーマントのうち (26) ~ (28) の発話をした A と E のみ大阪府での居住歴があるという点からも、ネンが大阪方言のノダ相当表現から借用されたものであると考えられる。ただし、これらの「動詞基本形+ネン」、「否定辞ン+ネン」という表現は、理解面では地方共通語と言えるが、金沢方言の生え抜き話者が使用することはまだほとんどなく、大阪居住経験者によって地方共通語のネンが一時的に使用されたものである。

7) 図3における「ンヤ」について、野間（2015a）では「ンヤ」は「ノヤ」や「ン」等も含んだ形式として使用されている。

4.1.3. まとめ

以上の分析の結果、平叙文においては、ノダ相当表現の使用傾向に関してほとんど変化していないことがわかった。一方で、前接形式がナ形容詞語幹・名詞や活用語のタ形の場合に地方共通語形ンヤの使用が多くなっている点、前接形式が動詞基本形や否定辞ンの場合に大阪方言ネンの借用が見られた点、全体として全国共通語形ノヤンダが使用されていた点においては、中村（2011）の調査時から変化していることが明らかになった。

4.2. 疑問文

次に、疑問文で使用された金沢方言のノダ相当表現の結果をまとめる。4.2.1では本稿の結果について、中村（2011）の結果と合わせて整理した表をもとに特徴をまとめ、4.2.2で中村（2011）との比較を行う。さらに、4.2.3で疑問文における10年間の変化をまとめる。

4.2.1. 本稿の結果

疑問文で使用されたノダ相当表現を中村（2011）のデータと合わせて整理したものが表8である。前節の平叙文の場合と同様に、表8の中の中村（2011）の数字も筆者が中村（2011）のデータを読み取って表にしているが、中村（2011）では真偽疑問文とWH疑問文を区別した若年層のデータが示されていなかったため、表8でも両者をまとめて提示する⁸⁾。また、表8の、中村（2011）のデータにおける形容詞基本形に後接するガムの使用数については、中村（2011）からは正確なデータを読み取ることが困難であったため、おおよその数字としている⁹⁾。4.1.1の表5と同様、「×」は表4において接続不可とした形式、空欄は接続可能であるが談話データ内では使用されなかった形式を表している。

なお、疑問文において5種類の前接形式ごとに後接できるノダ相当表現を示した表4に含めなかったため表8には記載しなかったが、表8に示したものの他に「動詞基本形+-eN」、「ナ形容詞語幹・名詞+ネン」という表現が疑問文に使用されており、真偽疑問文において「ナ形容詞語幹・名詞+ネン」が3例、WH疑問文において「動詞基本形+-eN」が1例、「ナ形容詞語幹・名詞+ネン」が1例見られた。(29)、(30)はそれぞれ動詞基本形に-eN(遊ぶ+-eN)が、ナ形容詞語幹・名詞にネン(大変+ネン)が接続した例である。

(29) G: どうやって遊べんて。(どうやって遊ぶんだって。) 【自己観察の情報確認】

(30) C: (研修)めっちゃ大変ネんろ。(めっちゃ大変なんですよ。) 【確認要求】

-
- 8) 中村（2011）においても、本稿においても、談話データの分析段階では、疑問文におけるノダ相当表現について真偽疑問文とWH疑問文に分けて分析しているが、それぞれの疑問文で使用されるノダ相当表現に差は見られなかったため、疑問文としてまとめて整理することに問題はないと考える。
- 9) 平叙文及び疑問文で前接形式が形容詞基本形以外の場合に関しては、中村（2011）の本文において、前接形式別に、年層ごとに使用されたノダ相当表現とその使用数が示されていたため、本稿の表を作成するにあたって中村（2011）の若年層のそれぞれの数字を取り出して表にまとめたが、疑問文で前接形式が形容詞基本形の場合に関しては、真偽疑問文における年代ごとのデータのみ示させていたため、WH疑問文で前接形式が形容詞基本形の場合の若年層の正確な数字が読み取れず、本稿の表ではおおよその数字となっている。

新田（2004）でも（29）、（30）のような疑問文で現れるノダ相当表現について述べられており、疑問文でゲン¹⁰⁾が現れるのは「ゲン+ロ（推量）」の形か「ゲン+テ（伝聞）」の形で、それそれが【確認要求】と【情報確認】の用法を担っている場合であると述べられていた。

表8 疑問文で使用されたノダ相当表現

疑問文			A群			ン	ノ	ガ
			ガン	ナン/な+ン	-aN			
本調査	真偽疑問文	動詞基本形		×	1	4		
		形容詞基本形	1	×	×	3	3	
		否定辞ン		×	×	×	3	
		ナ形容詞語幹・名詞	×	10	×	×		
		活用語のタ形	×	×	7	×		
	WH 疑問文	動詞基本形		×		6		
		形容詞基本形		×	×	2		
		否定辞ン		×	×	×	1	
		ナ形容詞語幹・名詞	×	5	×	×		
		活用語のタ形	×	×	2	×		
中村（2011）	中村（2011）	動詞基本形	1	×	×	25		
		形容詞基本形	5~6	×	×	5		
		否定辞ン	10	×	×	×		1
		ナ形容詞語幹・名詞	×	8	×	×		
		活用語のタ形	×	×	11	×		

以下、表8から分かることをまとめます。

[11] 前接形式が動詞基本形の時

真偽疑問文でもWH疑問文でも（31）のようなンの使用が多くなっている。

（31）C:研修ってどんなんするン？（研修ってどんなことするの？）

[12] 前接形式が形容詞基本形の時

方言形式ガンや全国共通語形ノの使用が見られたが、疑問文の傾向としては前接形式が動詞基本形の場合と同様に、ンの使用が多くなっている。

[13] 前接形式が否定辞ンの時

前接形式が否定辞ンの場合には、全国共通語形もしくは地方共通語形のノしか使用されおらず、方言形式のガンの使用は見られなかった。

[14] 前接形式がナ形容詞語幹・名詞の時

前接形式がナ形容詞語幹・名詞の時には、（32）のようにナン／な+ンが使用されている。

（32）C:どういう感じナン？（どういう感じなの？）

10) 新田（2004）では、「活用する語につく類」か「活用しない語につく類」かは関係なくE群の代表としてゲンを例に挙げ、両者は意味的に同様であると述べているが、（29）（30）のネンや-eNもゲンと同様の用法で確認要求や情報確認の意味を担うことができる。

[15] 前接形式が活用語のタ形の時

活用語のタ形の場合も、(33) のように-aN が接続する形が使用されている。

(33) E:3 人で乗っタン？ (3 人で乗ったの？)

以上の特徴をあらためてまとめると、次のようになる。

[11] 前接形式が動詞基本形の時、ンが多く使用される

[12] 前接形式が形容詞基本形の時、ンが多く使用される

[13] 前接形式が否定辞ンの時、ノが使用される

[14] 前接形式がナ形容詞語幹・名詞の時、ナン／な+ンが使用される

[15] 前接形式が活用語のタ形の時、-aN が使用される

4.2.2. 中村 (2011) との比較

次に、中村 (2011) の結果と比較する。中村 (2011) では疑問文で若年層が使用するノダ相当表現について、以下のように特徴をまとめている¹¹⁾。

[16] 前接形式が動詞基本形の時、ンが好まれる

[17] 前接形式が形容詞基本形の時、ンが好まれる

[18] 前接形式が否定辞ンの時、ガンが好まれる

[19] 前接形式がナ形容詞語幹・名詞の時、ナン／な+ンが多く使用される

[20] 前接形式が活用語のタ形の時、-aN が多く使用される

4.2.1 で示した本稿の結果と中村 (2011) の結果を比較すると、表 9 のようになる。

表 9 中村 (2011) と本調査の結果の比較 [疑問文]

前接形式	中村 (2011)	本調査
動詞基本形	ンが好まれる	ンが多く使用される
形容詞基本形	ンが好まれる	ンが多く使用される
否定辞ン	ガンが好まれる	ノが使用される
ナ形容詞語幹・名詞	ン・ナン／な+ンが多く使用される	ン・ナン／な+ンが使用される
活用語のタ形	ン・-aN が多く使用される	ン・-aN が使用される

両者を比べると、全体として、疑問文においても平叙文と同様に大きく変化している点は前接形式が否定辞ンの時以外見当たらない。以下、中村 (2011) の調査時から①変化している点、②変化していない点についてそれぞれ整理する。

① 変化している点

- 前接形式が否定辞ンの場合は、「否定辞ン+ガン」という表現が多く使われていた中村 (2011) の結果と一致せず、ノという全国共通語もしくは地方共通語の形式が 4 例見られた。否定辞ンに接続できる形式に方言形式のガンと地方共通語形式・全国共通語形式のノの両者がありながら、ノが使用されているという点では地方共通語化・全国共通語化と関わっているので

11) 4.1.2 の [6] ~ [10] と同様に、[16] ~ [20] の特徴づけも中村 (2011) による。

はないかと考えられる。

- 前接形式が否定辞ンの場合に限らず、中村（2011）では見られなかった形容詞基本形に後接する共通語形ノの使用が3例見られた。

② 変化していない点

- 表9より前接形式が動詞基本形の場合には-aNが接続する1例を除いてンが使用されており、中村（2011）とほぼ同じ傾向であると言える。
- 前接形式が形容詞基本形の時は、ンが比較的多く使用されるとともにノやガンも見られるが、ガンは中村（2011）でも使用されていたことから、変化している部分とは言えない。
- 前接形式がナ形容詞語幹・名詞や活用語のタ形の時には、真偽疑問文においてもWH疑問文においてもA群（ナン／なン・-aN）の形式が使用されており、傾向は変化していない。

5. 考察

本稿では、2.4において、次の2つを問題のありかとした。

- (a) 2022年現在の若年層（中村2011の調査より、年齢では約6年後に生まれた世代、調査では11年後）を対象に自然談話データを収集・分析することで、金沢方言におけるノダ相当表現の使用に関して方言形式と地方共通語形式が混在する状態となっていた中村（2011）以降の使用実態の変化を明らかにする。
- (b) さらに、ノダ相当表現の変化に基づき、言語変化のメカニズムについて考察する。本節では金沢方言のノダ相当表現をめぐるこの2つの問題について、5.1であらためて中村（2011）の結果と本研究の調査結果を比較することにより、中村（2011）以降現在までの約10年間の使用実態の変化を明らかにするとともに、5.2において、この言語変化の根底にあるメカニズムを明らかにする。

5.1. 10年間の変化

ここでは4節を踏まえて、中村（2011）の調査時点から本研究のデータにかけての約10年間のノダ相当表現の使用実態の変化を整理する。表7、表9を基に中村（2011）で示された高年層・中年層・若年層それぞれが使用するノダ相当表現の特徴をまとめたものと本稿の調査で得られたデータの特徴により、ノダ相当表現の使用実態の変化をまとめたのが次の表10である。網掛けされたところは中村（2011）の若年層と比較して変化している部分であり、「変化なし」の欄に記載した形式は中村（2011）の高年層の年代から変化せずに使用されている形式である。基本的には、中村（2011）の調査時の若年層と本稿のインフォーマントの比較を中心に考察するが、中村（2011）以降の約10年間に限らず中村（2011）における高年層の年代から変化していない形式については、高年層・中年層のデータも含めて考察を行う。

表10より、平叙文では全体として大きく変化はしていない一方で、ナ形容詞語幹・名詞や活用語のタ形に接続するノダ相当表現として地方共通語であるンヤの使用が多く見られ、さらに、使用数が少なかったため表10には含めていないが、中村（2011）のデータでは使用されていなかった地方共通語あるいは全国共通語由来のノという形式の使用も見られた。

表10 ノダ相当表現の変化（中村 2011 の表 20 に本研究のデータを追加）

前接形式	文タイプ ^o	中村 (2011)			本研究		変化なし
		高年層	中年層	若年層	若年層	若年層	
動詞	平叙文	ガヤ	→ ?	→ ンヤ	→ ンヤ	-eN	
	疑問文	?	→ ガ	→ ン	→ ン		
形容詞	平叙文	ガヤ・ゲー	→ ゲー・ゲン	→ ゲン・ンヤ	→ ゲン・ンヤ		
	疑問文	?	→ ガ	→ ン	→ ン(・ノ)		
否定辞ン	平叙文	ガヤ	→ ?	→ ゲン	→ ゲン	ゲン	
	疑問文	ガン	→ ガン	→ ガン	→ ノ		
ナ形容詞	平叙文	-eN	→ -eN	→ -eN	→ -eN・ンヤ	-eN	
	疑問文	ン・ ナ/な+ン	→ ン・ ナ/な+ン	→ ン・ ナ/な+ン	→ ン・ ナ/な+ン	ン・ ナ/な+ン	ン・ ナ/な+ン
活用語の タ形	平叙文	ンヤ	→ -eN	→ -eN	→ -eN・ンヤ	-eN	
	疑問文	ン・-aN	→ ン・-aN	→ ン・-aN	→ ン・-aN	ン・-aN	

疑問文においても動詞基本形、形容詞基本形、ナ形容詞語幹・名詞、活用語のタ形に接続するノダ相当表現にはほぼ変化は見られなかったが、否定辞ンに接続するノダ相当表現としては中村 (2011) で最も使用されていたガンではなく地方共通語あるいは全国共通語由来のノが使用されており、その他ノの使用は形容詞基本形に後接する場合でも見られた。

5.2. 言語変化のメカニズム

次に、5.1 で示した言語変化の根底にあるメカニズムについて、①全国共通語化・地方共通語化、②大阪方言の借用（ネン）、③変化が進んでいない形式（ゲン、-eN、-aN）の 3 つの観点から考察を行う。

まず、金沢方言で使用されるノダ相当表現で変化したのは、①全国共通語化・地方共通語化がさらに進行したところと、②大阪方言（ネン）を借用したところである。

① 全国共通語化・地方共通語化の進行

まず変化している点について、表 10 より、中村 (2011) と比較して変化している部分は全て全国共通語ノ（ダ）、地方共通語ンヤへの変化であることが分かる。このことから、現在の金沢方言におけるノダ相当表現では依然として方言形式と地方共通語形式、全国共通語形式の混在という状態が続いているものの、中村 (2011) の調査時よりは地方共通語化・全国共通語化が進んでいることが考えられる。これらの共通語化の要因には、国立国語研究所 (1974) で共通語化には年齢が関わっている（若い世代ほど共通語化が進んでいる）と述べられていたこと、真田 (1997) で五箇山の方言の共通語化には人々の社会意識の変化が関わっていると述べられていたことと同様に、人々、特に若年層の方言や地方共通語、全国共通語に対する意識が関わっているのではないだろうか。真田編 (2006:148-151) でも言語変化の進行段階で新たな表現が定着するかどうかは言葉の使用者の意識が関係すると述べられているが、本稿において共通語化の傾向が見られていることは、金沢方言話者である現在

の若年層が地方共通語や全国共通語を好ましいものとして取り入れ、使用するようになった結果であると考えられる。言語変化のプロセスの面でも、真田編（2006:148-151）で述べられていた古い形式を金沢方言、新しい形式を地方共通語・全国共通語とすると、現在の金沢方言のノダ相当表現は真田編（2006:148-151）の移行段階にあり、金沢方言、地方共通語、全国共通語が併存した状況になっていると考えられる¹²⁾。

② 大阪方言（ネン）の借用

4.1.2 より、本稿の調査では前接形式が動詞基本形、否定辞ンの場合において、大阪方言の借用と考えられる表現が見られた。動詞基本形や否定辞ンに後接するノダ相当表現としてはゲン等の方言形式があるにも関わらず、大阪方言のネンを使用しているという点から、金沢方言のゲンと大阪方言のネンの意味用法の類似性が大阪方言の借用の要因となったと考えられる。

一方、金沢方言で使用されるノダ相当表現には、変化せずに使用されているものもある。

③ 変化が進んでいない形式（ゲン、-eN、-aN）

③-1 前接形式が変化を阻止するノダ相当表現（否定辞ン+ゲン）

地方共通語の形式以外で変化していないゲンに関して、変化しなかった理由は前接形式との接続の可否が関わっていると考えられる。表3より、平叙文で否定辞ンに対して接続できるノダ相当表現はゲンのみであり、他の地方共通語・全国共通語の形式では対応できないために方言形式であるゲンが残ったのだろう。

③-2 前接形式が変化を阻止していないノダ相当表現（-eN、-aN）

方言形式-eN、-aNについては、変化を阻止する要因は特に見られないが、中村（2011）の調査時における高年層から現在の若年層にかけて継続的に多用されている。

以上、①～③が現在の金沢方言に起こっている言語変化・不変化であると考えられる。なお、表10のンヤ・ンの変化していない点については、すでに地方共通語化が進んでいたために変化しなかったのではないかと考えられるが（注12参照）、疑問文で形容詞基本形に接続するノダ相当表現には、ン以外にノの使用も見られていたことから、今後一部のノダ相当表現においてさらに全国共通語化が進む可能性も考えられる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、中村（2011）における若年層と、約10年の期間を経た現在の若年層（年齢的には約6年後に生まれた世代）の、それぞれが使用するノダ相当表現を比較することで、中

12) ヌヤ・ンについて、表10では変化していないところがあるが、これは、中村（2011）の調査時点ですでに地方共通語化が完了しているものである。新田（2004）でヌヤは地方共通語であり、ンはヌヤからヤが脱落したものであると述べられていることからも、ヌヤやンが使用されている場合に関しては地方共通語化が進んでいたために変化しなかった可能性が考えられる。

村（2011）の調査時に方言形式と地方共通語形式、全国共通語形式が混在した状態であったノダ相当表現が約10年の間にどのように変化したのかを明らかにし、さらにノダ相当表現の変化から窺うことのできる言語変化のメカニズムについて考察した。本稿の調査で明らかになった点を以下にまとめた。

- （ア） 地方共通語化・全国共通語化の進行。中村（2011）の調査時と大きく変化したのは、疑問文で否定辞「ン」に接続するノのみであり、依然として複数の形式が使用される状態で収束に向かっているとは言えないが、地方共通語形の「ンヤヤン」、全国共通語形の「ンダ」や「ノ」の使用が中村（2011）よりも目立っているという点では地方共通語化・全国共通語化がより進行していると言える。 （4.1.2節, 4.2.2節, 5.1節, 5.2節）
- （イ） 世代の変化と言語変化。言語変化のメカニズムとして、新田（2004）で示されていたような方言形式の変化が起こった後、中村（2011）と本稿において地方共通語化・全国共通語化の傾向が見られるようになってきており、世代の変化とともに、より若い世代が、併存する形式の中でより新しい形式を使用することによって、言語変化が進んでいると考えられる。 （4.1.2節, 4.2.2節, 5.1節, 5.2節）
- （ウ） 変化しない形式。地方共通語化・全国共通語化が進んでいるとはいえる、現段階では方言形式しか接続できない平叙文での否定辞「ン」のような前接形式もある。ただ、他のノダ相当表現と同様に、他方言や共通語の影響を受けて今後変化していく可能性も考えられる。 （4.1.1節, 4.1.2節, 5.2節）

一方、以下のことは今後の課題として残った。本稿は形式面の分析を中心としたが、意味も含めた分析を行うことで新たな傾向が見られるかもしれない。また、本調査は対面とzoom上の2つの方法を用いて自然談話データの収集を行なっており、データごとの収録時間の差や話者の性別の偏りもあったので、これらの条件をコントロールすることでより正確な若年層の傾向を見られるようになるのではないかと考えられる。さらに、中村（2011）と本稿の調査との期間ではあまりノダ相当表現の変化は進んでおらず、言語変化において約10年という期間は進行に十分な期間ではなかったという可能性もあるので、さらなる期間を経た後の若年層、あるいは現時点で本調査のインフォーマントより若い世代を対象に同様の調査を行うことで、変化した形式や変化しなかった形式がより明確になるのではないかと考えられる。

【参考文献】

- 国立国語研究所（1974）『国立国語研究所報告 52 地域社会の言語生活—鶴岡における20年前との比較—』秀英出版。
- 真田信治（1997）「階層性から一律化へ、そして標準化へ—五箇山親族呼称の60年—」『阪大日本語研究』9, pp.51-59.
- 真田信治編（2006）『社会言語学の展望』くろしお出版。
- 中村理沙（2011）『石川県金沢方言におけるノダ相当表現—自然談話データからみるバリエーションの使い分け—』2011年度大阪大学文学部卒業論文.（未公刊）
- 新田哲夫（2004）「石川県金沢方言のガヤとその周辺」中井精一・内山純蔵・高橋浩二編『日本

- 海総合研究プロジェクト研究報告 2 日本海沿岸の地域特性とことば—富山県方言の過去・現在・未来—』 pp.163-182, 桂書房.
- 日本語記述文法研究会編 (2017)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』 くろしお出版.
- 野田春美 (1997)『日本語研究叢書9「の (だ)」の機能』 くろしお出版.
- 野間純平 (2015a)『方言におけるノダ相当形式の発展—大阪方言と石川方言を中心に—』2014年
度大阪大学大学院文学研究科博士学位申請論文.
- 野間純平 (2015b)「石川方言におけるノダ相当形式—新形式の成立過程に注目して—」『方言の
研究』1, pp.251-276, 日本方言研究会.
- 野間純平 (2019)「大阪方言の平叙文における「ネンナ」—「ネン」に固有の意味特徴—」『阪大
社会言語学研究ノート』16, pp.35-54.

なかえ さわ (大阪大学卒業生)